
日本キャリア教育学会ニュースレター
2020 年度・春号 (2020.4.30 発行)

発行：日本キャリア教育学会 情報委員会
<http://jssce.wdc-jp.com/>

※2020 年度はニュースレターの特集テーマを
「キャリア教育の多様性」と設定しました。

※春号（第1弾）は「外国にルーツを持つ子どものキャリア教育」
ということで昨年度の大会シンポジウム登壇者の皆様に執筆して
いただきました。

※ニュースレターのバックナンバーは下記 URL から読めます。
http://jssce.wdc-jp.com/committee/information_comm/

+.....+

目次

【特 集】 キャリア教育の多様性

～外国にルーツを持つ子どものキャリア教育～

[白井章詞（長崎大学）](#)

[西田優子（全国夜間中学校研究会）](#)

[金川香雪（城東町補習教室）](#)

[福間慎一（西日本新聞）](#)

【書 評】

[『大学生のためのキャリアデザイン』](#)

[自分を知る・社会を知る・未来を考える』](#)

【お知らせ】

[IAEVG Journal および Newsletter へのアクセス方法](#)

[研究推進委員会企画 連載「研究をする」](#)

+.....+

【特集】 キャリア教育の多様性

～外国にルーツを持つ子どものキャリア教育～

キャリア教育の射程を問い直す

白井章詞

長崎大学

年号が平成から令和へと変わり、記念すべき最初の研究大会（第 41 回日本キャリア教育学会）を長崎大学で開催致しました。令和元年という記念すべき年に、本学において研究大会を開催できたことを大変光栄に思っております。

当初、実行委員会として、どのようなテーマ設定のもと、企画シンポジウムで何を発信していくべきか、大変に悩みました。議論の結果、研究大会のテーマは「キャリア教育の射程を問い直す」となりました。既存のキャリア教育を批判的に検討するだけではなく、いまだ射程外にいると思われる支援を必要としている層を照射したいと考えたからです。

我々が着目したのは、日本で暮らす外国籍の児童・生徒の存在でした。2018年に成立した改正出入国管理法は、在留資格「特定技能」を創設しました。特定産業分野において、今後 34 万人の外国人材受け入れを数値目標として定めています。特定技能 2 号では、家族帯同を認めていますので、これに伴い、日本の教育現場には、今後、外国籍の児童・生徒が一段と増えていくことが予想されます。しかしながら、日本語を母語としない児童・生徒にとって、言葉の理解と学習内容の理解という 2 つの壁を乗り越えるのは容易なことではありません。また、こうした児童・生徒のキャリア形成には、特有の難しさがあると考えました。1 つは、1991 年以降の日本経済が大きく落ち込んだ時期がそうであったように、安価な労働力として雇われた外国籍の労働者は容易に解雇される可能性が高いということです。そうした者のなかには、帰国する旅費がないためにホームレス化したり、その子弟は学業を続けられなくなる者もいました。その結果、地域社会が抱える大きな社会問題となりました。親の経済力に左右されることなく、学校は全ての児童・生徒にとって安心して学べる場所であり居場所であることが求められています。その安心は、一時的なまやかしかからではなく、

将来に対する夢や希望持ち、実現に向けた見通しから生まれてくるものでなくてはなりません。ですから、現状を報告することで、キャリアの専門家である皆様の知見を活かしていただきたいと思ったのです。もう1つは、こうした児童・生徒のなかには、将来、母国や第3国に移り住むことも考えられます。日本人の児童・生徒もこれまで以上にグローバル化した社会で生きていくことになるでしょう。そうなった場合、日本の社会システムを前提としたキャリア教育だけでは機能不全に陥る可能性があります。

私は、教育には大きな可能性があると感じています。しかしながら、全ての課題に応えられるほど万能ではありません。日本におけるキャリア教育は、今日までの20年間のうちに急速に広がり、幅広く実践されるようになりました。既に、隅々まで行き渡っているかのような印象を受けます。しかしながら、視点を変えると、まだまだ取り組むべき余地の大きさに気づかされます。今回の教育現場からの報告が、参加した皆様にとって、視点を変える1つの機会になれば幸いです。

夜間中学に通う学齢超過の子どもたちの現状と課題

西田裕子

全国夜間中学校研究会 理事

1 外国にルーツをもつということ

日本で生活する外国にルーツをもつ人々は、さまざまな問題を抱えている。言葉の壁は、生活言語を習得しても解消されない。語彙だけでも、和語や漢語、外来語など、多種多様である。日常会話ができて、漢語や外来語で表現される学習言語を理解できないことが多い。また、行政機関や各専門家、報道機関などは、日本母語話者でも理解できない言葉を日常的に使っている。さらに、文化や社会制度、生活背景などの違いにより、社会から孤立する人も多い。

言葉の壁や生活背景の違いは、外国にルーツをもつ子どもたちの教育にも大きな影響を与えている。夜間中学には、このような問題を抱えた人々も通っている。

2 夜間中学に通う学齢超過の子どもたちの現状

夜間中学には、公立の夜間中学校(全国34校)と、ボランティアが運営す

る自主夜間中学とがある。公立の夜間中学校には、さまざまな事情で実質的に義務教育を受けることができなかった学齢超過の人々が通っている。

(詳細は「全国夜間中学校研究会ウェブサイト」参照)

http://zenyachu.sakura.ne.jp/public_html/default.html

夜間中学に通う外国にルーツをもつ子どもたちが抱える問題には、日本語の未習得、義務教育の未修了、教育制度や文化の違いなどがある。母国で義務教育を修了していても、言葉の問題や、教育内容が十分でない場合がある。また、義務教育制度の違いから、高校受検に必要な条件を満たしていない場合もある。

日本語の未習得は、日常会話や日本社会の文化への理解、義務教育段階の教科知識の習得、市民的教養と批判的思考力の獲得、社会とのつながりなどに大きな影響を与え、子どもたちの進学や生活を困難にする。また、義務教育未修了のまま学齢超過した子どもたちは、日本だけでなく母国でも、将来への展望をもつことができない状況に追いやられている。

夜間中学校の入学相談に来る 10 代の学齢超過者の中には、昼の中学校に編入学する方がよいと思われるケースも、少なくない。しかし、教育委員会の認識や学校の受け入れ体制が十分でないために、昼の中学校への編入学がかなわないことがある。また、日本の教育制度に対する保護者や本人の理解が十分でないために、学齢期に母国と日本を往来し、義務教育未修了のまま、学齢を超過することもある。

このような問題の背景には、家庭における経済的問題と教育の悪循環がある。生活基盤を築くことに精一杯の家庭の中には、学校経験が不十分な保護者もいる。また、外国にルーツをもつ子どもたちの教育問題を考慮していない、日本語習得を前提とした日本の教育制度や、子どもたちを家族滞在で呼び寄せることのできる年齢の問題がある。

3 これからの教育における課題

グローバル化する日本社会で、外国にルーツをもつ人々の学習権を保障するシステムの構築は、早急に取り組むべき課題である。そのためにも、外国にルーツをもつ子どもたちの日本語習得や学習機会の保障、小・中学校や高等学校における受け入れ体制の充実、保護者の社会認識の育成が必要である。

また、子どもたちの母語・母文化の保障や居場所づくり、孤立する保護者の支援などは、学校と地域の連携によって進めていかなければならない。

私が出会った外国にルーツがある子ども達の現状とその後
～ベトナム人の子どもを中心に～

金川香雪
城東町補習教室 代表

1 私が出会った外国にルーツがある子ども達とは

姫路市内の小学校で教諭として21年勤務し、1995年4月にベトナム人の子ども達を支援するための日本語指導担当教諭という立場で外国人の子どもや保護者に対する日本語、生活、学習全般の支援を開始した。日本語指導担当者として4校の学校に勤務したが出会った子どもは、ベトナム、カンボジア、ブラジル、中国、フィリピン、ペルー、韓国、スリランカ、ナイジェリア等である。

2 ベトナム人の子ども達の現状

姫路市にインドシナ難民受け入れのための「難民定住促進センター」が1979年12月から1996年3月まで開設されていたので、ベトナムからの難民が多く居住している。難民として渡日した1世だけでなく、日本で生まれた2世や3世、家族として呼び寄せられた子ども、再婚呼び寄せで連れてこられた子どもなど、現在も増えている。親世代は、県営住宅や市営住宅等ベトナム人集住地域の中で生活し同胞が多い職場に勤務しているため母語での会話に頼り、日本語での会話が十分できない人が多い。日本生まれの世代は、保育所や学校で日本語を習得し母語を使わなくなり、保護者との意思疎通が難しくなっている。しかし、日常会話ができても学習言語は難しいため学年が上がるにしたがって学習内容を理解することが出来ず、高校や大学等進路決定時期になって希望する進路に進むことは難しい現状がある。

3 進路について

子ども達は、出会った当初は、高校に進学することを諦めていた。日本の教育システムが分からない親には相談できず、家族と同じ職業に就くしかないと考えていた。しかし、近年になって、学校だけでなく、城東町補習教室で毎週土曜日に日本語・生活・教科学習の支援を受けて、希望する進路に進み夢を実現させた先輩の姿を見ることが出来るようになってきた。

それにより、自分の人生は自分で切り開いていくしかないと考え頑張って勉強する子どもたちが増えてきた。

4 2019年度の進路状況 8名

対象在籍者：私立中高一貫校高等部2名（ベトナム）、県立高校1名（中国）、国立教育大学1名（日本・フィリピン）、私立大学栄養学部1名（ベトナム）、市立看護専門学校1名（ベトナム）、県立大学経済学部から大阪市内の商社1名（ベトナム）、中学卒業後未進学1名（フィリピン）。8名中7名は、小学生の時から補習教室で学習し学習支援の他に進路指導とキャリア教育を行ってきた。学力をつけるだけでなく、自分が今後どのように生きたいのか、何の仕事に就きたいのかを常に意識し、そのために必要な学習は何か、力をつけるにはどのようなことをしないといけないのかを話し合いながらキャリア教育を進めていった。小学生には、キッズニア甲子園で職業体験をする機会を設け自分の知らなかった仕事に対する興味や関心を持つ機会とした。中学生以上は、実際に姫路市内にある中堅企業の見学を通して、職業に対する意識や理解を深め進路を決定する手助けとなる機会を設けた。その結果、目的意識を持って希望する進路に進むことが出来るようになった。

しかし、中学1年生で渡日したフィリピンからの女子は、日本の学校生活に適応できず入学した中学校から他校に転校した。そこでも適応することが出来ず不登校になり、1年前に土曜日の補習教室に居場所を求めて来るようになった。進路決定時期には日本語力がついていなかったため進学する高校が見つからず日本での生活も進学も諦めざるを得ない状況になった。母国に帰って高校に進学することに一縷の望みを抱いて卒業式を迎えたが、運悪くコロナウイルスが世界中に蔓延し母国に帰国することが出来なくなり進学の時期を逸してしまった。落ち込んでいた彼女を励まし、来年までに日本語力をつけ日本の高校に進学する方法を模索することを約束し、日本で生きていくモチベーションを保つことがようやく出来たが1年後が心配である。渡日歴の浅い外国からの子ども達が進路を見据え夢を実現させていくにはまだまだ厳しい現実がある。

5 必要な支援

日本語力と学力をつける以外に、小学生の時から自分のアイデンティティを見つめ、夢を持ち、それを実現するために必要な力は何かを意識させる活動としてのキャリア教育を進めていく必要がある。中学生からは、具体的にどのような職業があるのか企業見学を通したキャリア教育へと繋

げ、何度も繰り返して様々な職業があり頑張れば望む職業を選択できることを伝えることが大切であると思われる。

進路を切り拓いていった先輩の話や姿に触れる機会を設け、モチベーションを保ち続けられるような支援も必要である。

6 今後の課題

外国にルーツがある子どもたちに対して日本人と違った進路指導やキャリア教育をする必要があるのではないか。

“多文化共生”元年へ

～「新 移民時代」取材班からの報告と

「やさしい日本語」の取り組みについて～

福間慎一

西日本新聞 クロスメディア報道部 デスク／記者

もはや常識ですが、日本の人口は減っています。そして日本で暮らす外国人は増えています。2019年6月末で282万人。日本で暮らす人の50人に1人です。そして当然、外国にルーツがある子どもも、急増しています。日本語指導が必要な外国籍の児童・生徒は約3万4000人。10年間で1.5倍に増えました。

2018年4月に就労目的の在留資格を新設する改正入管難民法が施行されました。欧州では戦後、出稼ぎ者を受け入れた欧州で排斥運動が社会問題化しました。よく知られているのが、劇作家マックス・フリッシュの「労働力を呼び寄せたつもりが、やって来たのは人間だった」という言葉です。「労働力」「人材」という言葉に置き換えられがちな外国人は、生活者でもあります。まず共に生きる存在としての視点が必要です。

共生を妨げる最も身近で最も大きな壁が「言葉の壁」です。多様な国籍の方が来日する今日、多言語での対応には限界があります。注目されているのが、日本語が苦手な外国人にも伝わりやすい「やさしい日本語」。1995年の阪神大震災の際に日本語も英語も理解できず困った外国人がいたことから提唱されました。「優しい」と「易しい」という意味が込められていて、今では自治体などが行政情報の発信にも活用しています。

「高台に避難を」は「高い ところに 逃げてください」に。漢字にはルビを付け、単語を判別しやすい「分かち書き」に。話すときは、はっきり、さいごまで、みじかく、の「はさみの法則」で――。でも、先立つのは「どうしたら相手によりよく伝わるだろうか」という想像力です。

日本で暮らすとっかかりとして「やさしい日本語」が普及すれば、外国から来た人たちの大きな力になります。西日本新聞も地域に根ざす報道機関としての使命を果たす思いから、「やさしい日本語」でのニュース発信を2018年11月に始めました。子どもや障害がある人にとっても分かりやすい「やさしい日本語」は、他者に寛容な社会の潤滑油になり得ます。

2019年6月、外国人への日本語教育を国の責務とする「日本語教育推進法」が成立しました。「やさしい日本語」の第一人者でもある一橋大の庵功雄教授は本紙のインタビューに、次のように語っています。

「タイから来た技術者が『私』のことを『わたし』と言ったとする。それだけでその技術者を能力が低いと言えるのか。もし私たちが『she』と『sea』を分けて発音できないだけで、英語圏で無能扱いされたら、どう思うだろう。発音に多少気になるところがあったとしても、それは日本語。重要なのは、相手が何を伝えようとしているかを理解すること。『公平な耳』を持つことが、多文化共生への第一歩だ。」

西日本新聞のキャンペーン報道「新 移民時代」の記事一覧はこちら

https://www.nishinippon.co.jp/theme/new_immigration_age/

「やさしい日本語ニュース」の一覧はこちら

https://www.nishinippon.co.jp/theme/easy_japanese/



【書 評】 『大学生のためのキャリアデザイン』

自分を知る・社会を知る・未来を考える』

『大学生のためのキャリアデザイン』

自分を知る・社会を知る・未来を考える』

(川崎友嗣 (編著) ミネルヴァ書房 2019)

<https://www.minervashobo.co.jp/book/b377523.html>

本田周二（大妻女子大学）

本書は大学 1, 2 年生を対象として執筆されたワーク形式のキャリアデザイン入門書である。第 1 部「社会で働くとは」（第 1 章～第 5 章）、第 2 部「自分を知るとは」（第 6 章～第 10 章）、第 3 部「将来を考えるとは」（第 11 章～第 15 章）の 3 部構成で、それぞれの章に「個人ワーク」と「ペアないしグループワーク」が組み込まれているため、半期 1 コマの授業としてこのまま用いることができるようになっている。

類似の書籍はこれまでにいくつも出版されているなかで、本書の特筆すべき点は、いくつもあるが、ここでは 2 点に絞ってお伝えしたい。1 点目は、第 1 部「社会で働くとは」で自身のキャリアをデザインする前提として雇用形態や産業・職業分類についてしっかりと理解させることに重点が置かれている点である。キャリアデザインという、つい、自己理解（第 2 部）や将来の目標（第 3 部）に焦点があたりやすい。しかし、雇用形態や産業・職業分類、企業とは何かについてその基本的な考え方や知識を押さえておくことは、自己理解や将来の目標を考えるにあたり大変重要である。本書では、これらの内容について要点をコンパクトに整理したうえで提示しているため、大学 1, 2 年生にとってもスッと理解することができるだろう。そして、第 2 部や第 3 部の中に適宜、第 1 部の内容との連動がなされているため、ここでまた理解が深まるように構成されている。

2 点目は、環境によるキャリアの影響として「must、can、want」の 3 つを取り上げ、can（できるからと自分の意思で動いて積み重ねてきた経験・体験・学習）や want（やってみないと自らの意思で望んで積み重ねてきた経験・体験・学習）はもちろんのこと、must（しなければならないと自分の意思とは関係なく積み重ねてきた経験・体験・学習）の重要性を強調している点である。発達課題（個人が健全な心身の発達を遂げて社会に適応するために、各発達段階で達成することが期待される課題）という用語を初めて用いたといわれるアメリカの教育学者であるロバート・ハヴィガーストは、発達課題を「個人の成熟の度合」「個人の展望・期待・価値観」「社会の要請」の 3 つにより決まると述べている。ハヴィガーストは生涯発達を個人と社会の相互作用によって捉えたが、本書の「must、can、want」にも通ずるものがあるのではないだろうか。つまり、must（社会の要請）によって can（個人の成熟の度合）が促され、want（個人の展望・期待・価値観）が形成され、自身のキャリア発達が促されていくというプロセスで

ある。大学1, 2年生が自己理解を進めていくうえで、このような考え方の枠組みを提供してくれる書籍は少ないため、授業者にとって本書は大変貴重だといえる。

他にも、「自分を知る」視点として、時間・環境・職業とのかかわりという複数の視点が示されていることで、学生はより多面的に自己をとらえることが可能になっている点など読めば読むほど丁寧な工夫が散りばめられた本書は、初年次を対象としたキャリア教育を担当されている授業者にとって必読の一冊といえるのではないだろうか。

【お知らせ】 IAEVG Journal および Newsletter へのアクセス方法

IAEVG Journal および Newsletter へのアクセス方法

1 以下の URL にアクセスする

<https://iaevg.com>

2 AIOSP と世界地図を組み合わせたロゴが表示される。そのまま待っているか、画面上のどこかをクリックするとログイン画面に変わる。

3 画面上部に e-mail と password を入力するとログイン完了

e-mail: *****

password: *****

(会員のみ利用可能なので詳細は事務局にお問い合わせ下さい)

4 ログイン後に表示される日本キャリア教育学会会員情報（会員番号や会費納入情報）の下にスクロールしていくと Journal や Newsletter の閲覧およびダウンロードのページにリンクされるボタンがありますので、それらを用いて必要な作業を行なってください。

5 閲覧・ダウンロードなどの作業を終了した場合は、最初の画面 (<https://iaevg.com>) に戻り Logout してください。

* 不明の点があれば、国際交流委員会 (jssce-iec@googlegroups.com) までメールにて連絡ください。

研究推進委員会企画 連載「研究をする」

研究推進委員会では会員の研究力向上のための取組をしています。学会ウェブサイトには連載「研究をする」が掲載されていますので、是非ご覧ください。

連載「研究をする」

http://jssce.wdc-jp.com/committee/research_advance/

- ◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員の皆様にお届けするものです。
- ◇会員の皆様のメールアドレス確認・登録を継続的にしております。身の回りの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合、学会事務局 (jssce-post@bunken.co.jp) 宛に受信用メールアドレスから登録申請していただきますよう、お伝えください。
- ◇ニューズレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。情報委員会 (jssce-ic@googlegroups.com) まで気軽にご連絡ください。
- ◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイト上に書名と著者名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。
- ◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会 発行
委員長：家島明彦 副委員長：渡部昌平
委員：京免徹雄、長尾博暢、高丸理香
竹内一真、橋本賢二、本田周二
